参考４

第 75 回全国植樹祭埼玉県準備委員会（第１回）　議事概要

日時：令和 3 年 9 月 14 日（火）10：30～12：00
場所：県庁本庁舎庁議室（オンライン開催）
出席者：別紙出席者名簿のとおり※会議資料参照

１　あいさつ

高柳副知事より挨拶

２　議事

本会議を公開とすることが議決された。

（１）第 75 回全国植樹祭埼玉県準備委員会の設置について【資料１】

第 75 回全国植樹祭埼玉県準備委員会の設置について、事務局より説明。

準備委員会設置要綱第 3 条第 2 項及び第 4 条第 2 項の規定により、委員長が副委員長 3 名を指名した。

①東京農業大学客員教授　宮林委員（学識経験者）
②埼玉県緑化推進委員会代表理事　岡委員（林業関係団体代表）
③埼玉県森林組合連合会代表理事会長　吉田委員（林業関係団体代表）

（２）全国植樹祭の概要について【資料２】

（３）開催までのスケジュールについて【資料３】

全国植樹祭の概要についておよび、開催までのスケジュールについて、一括して事務局より説明。

（４）基本構想について【資料４－１～５】

基本構想・開催理念について事務局から説明があり、説明のあった構成で進めることが議決された。また、委員からの意見を参考に、事務局で開催理念の素案を作成することになった。選定基準と選定手順に基づいて委託による調査を実施することについて決議された。

【主な意見】

◆開催理念について

委員：○例えば気候変動関連のことを入れてはどうか。山の管理の在り方は土砂災害や豪雨の被害の大きさを左右する。近年 100 年 200 年に 1 度の豪雨が頻繁に発生している。この規模の豪雨があると斜面崩壊が起き、土砂と樹木が一緒に流れ出し、下流で災害を引き起こす。

2017 年の九州北部豪雨の時には、丁寧に手入れされた山が崩れ、下流に被害を拡大させた。災害発生時に被害を少なくするためには、樹木を大きくなり過ぎないように管理していくのが良い。

○適正に森を管理することによって、二酸化炭素の吸収量を増やし気温上昇を抑制すると同時に災害の被害を軽減するということを押し出して理念に盛り込むのがよいのではないか。

○前回の本県開催からこの 70 年の間に、森だけではなくてその下にある土も変化している。森が荒廃していた 70 年前は、毎年の雨で表土は削れて薄い状態が保たれていた。しかし数十年が経過し森が回復した現在は、表土が動かなくなった。表土は、岩が風化して自然に造られるものである。鹿児島県の調査例だと１００年で５０ｃｍ、２５０年で８０ｃｍ溜まった。その状態で次の大雨や地震が起こると急な斜面では表土は崩壊し、樹木も一緒に落ちる。

○現在は、埼玉県をはじめ日本の山は、江戸時代以降、かつてないほど樹木が大きく育ち、かつその下に表土が溜まっている状態であり、斜面崩壊の災害が起こると、これまでよりも大きな被害をもたらす可能性がある。

○樹木は、人の手でコントロールできるが、土が溜まるのは自然の仕組みなのでどうすることもできない。防災という観点から、植樹祭は植えるだけではなく、伐って、利用して、また植えるということを強く印象づけるような、例えば、66 年前に昭和天皇陛下が植えられたヒノキは大きく成長しているので、今上天皇が伐採して皇居や埼玉県の公共施設に使うこともできるのではないか。

委員：○昨今気候変動等様々な環境問題が起きており、森と私たちの暮らしの関係は重要視されるべきものである。植樹祭が開催される2025年頃は、2030年のカーボンオフセットの問題も具体的な課題としてこの時期に入ってくることを踏まえ、「次世代への繋がり」という側面も開催理念に入れてみてはどうか。

○「繋がり」ということで考えると、上流・中流・下流という概念をとると「流域連携」になり、下流の東京の生活が守られているのは、荒川上流の森林が土砂の崩壊を防いでいることで連携している。このようなことを踏まえて、近隣都県を含む広域的な枠組の中で、森林をみんなで守って繋いでいくという理念を打ち出したらどうか。

○また、森は今元気がなくなっている。森の元気を取り戻す、元気な森を造るというメッセージも開催理念に加えてほしい。

○私たちの暮らしの中で、健康問題は大きな関心事である。今、都市に人が集中し、多くの人々はストレスを抱えている。そのストレスを解消するのに、森は非常に大きな効果を発揮する。この健康問題を議論するのも一つではないか。

○森と暮らしとの関わりは非常に強いものになる。森を守り、木を育て、木材

を使い、循環して、繋いでいくことを人々の暮らしという視点からとらえてみてはどうか。植樹祭は森林・木材を分かりやすくPRする場としても活用してはどうか。

○埼玉県の植樹祭として、地球温暖化や環境危機における森林（緑）の大切さと位置づけを新たにするという意味で、流域を単位として森林を守る展開を全面に出し、荒川流域をイメージして、「未来を育む元気な森林づくり」として流域森林共生圏などを立ち上げ、東京都や千葉県・茨城県を巻き込んだ植樹祭に展開し、全国に先駆けて、将来元気な緑をつなぐ担い手である子どもたちを中心とする「こどもの森」を全国にアピールしてはどうか。子どもの森は地域の森を守るということから、流域単位で下流域と上流域の子どもたちが交流しながら、共通財産である森林（緑）を守る活動（環境教育や減災教育、グリーン・インフラあるいは流域治山などを意識した森林体験の場を整備）を全国にアピールしてはどうか。（メールによる意見）

委員：○埼玉県内の各地は水系で繋がっている。森と川の源流から始まって各地が繋がるいうことを念頭に進めるといいのではないか。

埼玉県は自然・人・産業のバランスが非常に優れている。埼玉県は関東全体の中でも、地下水系に非常に恵まれていることから、埼玉には酒蔵が多く、また、様々な産業が発展している。森と水の繋がりを意識し、更に産業にもつなげていく、そのような観点も必要ではないか。

○首都圏の主要な役割を担う荒川の水源が県内にあること、水脈が多く形成されていることも開催理念に生かしてほしい。（メールによる意見）

○自然と経済活動がバランス良く同居している本県での開催なので、ＳＤＧｓの観点で豊かな水と緑を守り育む緑化を表現する植樹祭が埼玉らしさを表現することになる。その点で水源である山地に近い会場選定が望ましい。

植樹会場と水源をドローン映像でリンクするのもよいのではないか。（メールによる意見）

○ボランティアによる植樹等の記念事業を Web 中継で繋ぐなどして全県一致協力しての開催を考えてほしい。（メールによる意見）

委員：○木材の販売だけでなく、森林の持つ様々な機能をどのように価値化するかを含めて農林業の推進をうたってはどうか。

また、木材を生活の中に取り入れることで循環型社会に繋がると考えられるので、この点も開催理念に取り入れてはどうか。

委員：○地域の特質も加味することも大事である。例えば、

・江戸時代から続く、都市部への木材供給地であること

・３００年前、すすきヶ原だった土地を耕作地に変えるため、冬の北風を防ぎ、また、肥料となる林と一体となった短冊状の形態を有する三富新田は、

世界農業遺産に登録も目指していることから、全国に誇れる森の利用ではないか。（メールによる意見）

○また、国木田独歩が描いている武蔵野の平地林があり、そのような都市における緑の重要さ、森がその土地で生活する人に組み込まれている様子などを加味してはどうか。（メールによる意見）

◆開催候補地について

委員：植樹地の分散とはどのような意味か。

事務局：式典会場のすぐ近くで、特別招待者を中心に植樹していただくところを設定するのが基本である。また、一般招待者の方に植樹していただくための場所などを分散して設定することも可能。

なお、植樹地については来年度以降の基本計画の中で検討される予定である。

委員：島根県の植樹祭はリモート開催であった。そうしたハイブリットの手法も上手く活用できれば良いのではないか。

委員：これまでの植樹祭では、会場に既にある木を伐採し、再び植樹するといった事例が結講あった。開催場所を決める際、もし既存の木を切る必要があるときは、その木はどのように使われたかという、後追いをしっかりするべきである。できることならば、森林を守り、繋げるという意味からも、会場となる森林を皆伐することは避けたいもの。

委員：今のコロナ禍の状況を考えると、今までと同じような開催ができるかどうかの見通しをたてるのは難しいのではないか。

事務局：コロナの関係については、国土緑推に相談しながら進めており、現段階では通常通りの開催を計画して問題ないという話を聞いている。ただこの状況が今後どうなるか分からない状況であるため、委員の皆様の貴重なご意見をいただきながら検討していきたい。

委員：候補地案があるが、これは基本的に4ヶ所から選定するということで、考えて良いのか。また、発注に対しての意見をどういう形で反映して作り上げていくかのか。

事務局：開催候補地は4ヶ所から決めたいと考えている。開催候補地の調査に際しては、貴重なご意見をできるだけ反映させるようにする。

（5）準備委員会の進め方について【資料5】

準備委員会の進め方について、事務局より説明。